

## 鏡石北原のバケモノ退治(三)

むかし　むかしのある年の　ある日のことでした。

町守屋のお寺に、笠石村と成田村の二人の庄屋さまがたずねてきて　畳に頭をすりつけて　ペコ　ペコ　しながら、お師僧様にたのんでいます。

それは　笠石と成田の境えの北原という山道に、恐ろしいバケモノが出て　村の人々が大変困っているから　お寺の法念さんに助けていただきたいというお話なのです。

もしも　退治をしていただければ　そのご恩に沢山のこほうびを差し上げますとのことでありましたので、法念は「それでは　そのうち　機会をみてお伺いいたします。」と、引き受けました。

ある日　法念は、お師僧様のお命令で手紙を持って須賀川の千用寺様、上小山田の古寺山、三城目の景政寺様等の寺々を廻って行くことになりました。

バケモノの出るといふ北原というところにさしかかった

頃は、夜の十一時頃　そろ　そろバケモノが出る時刻です。

風もないのに草木がゆれる。なまぐさい風が時々サーサー　と顔をなでる。法念は、「これはいよいよ出るぞ」と思ったから、天狗のウチワでパッサ　パッサとあおいで百姓姿にバケ、すたこら　すたこら歩いて行くと、小さな小僧が　トコ　トコと一人で歩いて行くのです。

足が痛いのか　びっこを引いているのです。法念の百姓は「足が痛そうだからおんぶしてあげっぺえー」と小僧さんと目を会わせたら「これは驚いた　一つ目小僧で目が黄色く光って見える」ではないか。

おんぶした小僧の目方がだんだん重くなってきた。不思議に思っ後を向いたら「モー」と　真黒な大きな牛が目玉をギョロ　ギョロ。

そこで法念の百姓は、「重くてかなわねえーこんどは私が牛に乗せてもらうべえー」といって、牛の背に乗りました。ここで法念は、北海道の月の輪クマにバケて牛を背中から、熊のするどいツメをたておさえつけましたからたまりません。

バケモノの牛は驚いて「さあ大変だ」とクマの手を振り